

後 記

千葉大学30年史編纂のことが発議されてから、今ここにその刊行をみるまでには、およそ5年の歳月が流れているが、ここでその経過のあとや、方針や問題となった点等をしたため、協力をいただいた本学内外の方々のご諒解を得たいと思う。

1. 経過について

はじめて、この30年史編纂・刊行のことが正式にとり上げられたのは、昭和49年11月21日の評議会に相磯学長からこの提案がなされたときであった。

相磯学長は、その後、この提案を更に押し拡げて、本学の30周年を記念すべき事業として、より広い視点から構想を立てたいとの考えから、翌50年3月の部局長会議に「千葉大学30周年記念事業企画準備委員会」の設置を提議されて、同4月17日の評議会にこれを提案し、その承認をえた。

この決定に基づいて各部局より1名の委員が選出され（表(1)）、記念事業の内容や実施方法等について検討がなされ、その素案が作られた。

その内容は、(1)千葉大学30年史の編纂・刊行(2)国際交流基金の創設(3)学生・教職員の研修・厚生施設の新設を3本の柱とするもので、そのために約1億円の目標額の募金を行うこととし、とりあえず本学の教職員に醸金を呼びかける、というものであった。

この素案が、6月の部局長会議で再検討され、各部局からこれについての意見を聴することが決定され、同月24日「千大庶発第148号千葉大学創立30周年記念事業について」という事業内容の検討の依頼状が各部局に発送された。

同年9月末に集められた各部局の意見は、部局によりまちまちであったが、(1)30年史の編纂・刊行については概ね賛成(2)国際交流基金の創設については、趣旨においては賛成であるが、きびしい情勢下においては、募金には困難が伴うので可能性を考慮して慎重な配慮が望ましいという慎重論が多く(3)学生・教職員の研修・厚生施設の企画については殆んどが賛成であった。

後 記

このような各部局の意見をふまえて、企画準備委員会は、検討を重ね、原案を推進する方針を立てたが、特に年史については早急に着手する要があり、そのため編纂委員会・専門委員会並びに編集室の設置と専任の事務職員の任用の早急な手配の必要をみとめた。

昭和51年1月の評議会において「千葉大学30年史編纂委員会規程」が承認され、これに基づいて各部局から推薦された編纂委員による同委員会が発足し(表(2))、また本部5階の調査資料室が編集室にあてられ、専任の事務職員が雇傭されることとなった。

国際交流基金については、法人設立要件について困難な点があり、任意団体とする案も検討されたが、寄付者の免税措置等について問題が残り、その扱いについては学長と事務局に一任された。

翌2月の評議会において、年史編纂の準備金の学内醸金の方針が決定され、学長より次のような「教職員の皆さんへ」という依頼文とともに、「千葉大学30年記念事業(年史刊行)醸金趣意書」が配られた。

教職員の皆さんへ

昭和51年2月19日

千葉大学30年史編纂についてお願い

学 長 相 磯 和 嘉

ご承知のように、本学が新制大学として発足してから26年が経過しました。大学の歴史として4半世紀は決して長い歳月とは申せません。一つの大学が歴史の重みをもちその伝統を誇りうるようになるためには、100年の積み上げを必要とするものでありましょう。

しかし、自他共に許すような大学に成長するためには、最初の25年間は草創の時期として極めて重要な意味をもつ時代でもあります。

振り返ってみれば、戦後という日本の歴史の転換期の試練の中で、民族再生の担い手の一つとして理想を高く掲げてスタートした新制大学の歩んできた道は、現実には極めて厳しいものでありました。教職員にとっても学生にとってもそれは生れ出ずるものの悩みそのものの姿でありました。ただ重なる錯誤と挫折の連続であったとも申せましょう。それだけに、この26年の来し方のありようは我が大学にとって貴重であり、それと運命を共にしてきた

私共個人にとってもかけがえのない体験であったと思います。それらはすでに今日おびたしい資料の累積となっています。この資料は本学の将来のために、収集し整理し編集して保存されなければならないものと思われます。

もとより国立大学の資料の保存の仕事は、それぞれの大学の業務の一つとして国の経費によってなされるべき性質のものであります。ではありますが、資料をただ積み上げて保存しておくだけでは大学の歴史とはなりえないので、それぞれの時代の担当者が語りつぐべきものとして編纂されなければ、史料として生かされないし、といて貴重な教育研究経費の多くをこれに割くことも許されないことでしょう。

そこで、趣意書に書かれたような主旨で教官諸氏の浄財を醸金していただくことを企画した次第であります。

私としては、可能な限り総ての諸君の参加をえて全学の共同事業として30年史をつづることとしたいものと念願しております。何卒私共の志す微意にご賛同いただいてご協力賜りたくお願い申し上げます。

この「趣意書」には、教官を主たる醸金の対象とし、1口1,000円、4月末を目標に募金することがうたわれており、その主旨としては、年史編纂作業を一日も早く進めるための運転資金が必要であり、またこの醸金を契機としてこの事業に対する意識を高め、全学的協力体制をつくるという意向がしたためられている。

この醸金は、予定より遅れ7月に集計されたが、全部局の教官のみならず事務系職員の協力も得られ、その額は必ずしも多くはなかったが、全学教職員の参加という趣旨は達成することができた。

さて「編纂委員会規程」に基づいて、同委員会が開かれ、その運営のしかたや具体的作業の進め方について検討がなされたが、先ず既に年史を刊行している他大学について調査し、その編纂の方針・作業計画・組織等の実情を検討することとした。

他大学の年史では、特に東京大学・京都大学・新潟大学・岡山大学・弘前大学等がとり上げられ、組織・計画・運営・予算等の実情が調査され、それらを参照しながら、本学の特殊事情をふまえ作業の順序が話しあわれた。

後 記

これらの大学関係者から受けた示唆には教えられるところが少なくなかった。

さて、このような年史編纂の仕事を具体的に推進する中核の役目を果すものは、専門委員会であり、もしこれにその人を得なければ、折角の計画も機動力を失って停滞し、又資料の山に入って道を見失うことになる。

この度の年史編纂の場合は、幸いにその人を得ることができた。(表③)

即ち副委員長小笠原長和教授は、『千葉県史』『千葉県議会史』その他市町村史を手がけ、年史編纂には豊かな経験をもつ日本史の研究者であり、川名登・堀江俊次・池田宏樹・亀松玲子の4氏は、本学文理学部で史学を専攻し、小笠原教授とともに幾つかの年史編纂を手がけた地方史の中堅の研究者である。また椎名萬吉教授は、わが国の教育学部では数少ない大学史の研究者である。

これらの方々が多忙な本務の時間をさいて献身的に尽力をして下さった。

学内醸金によって運転資金が得られ、専門委員会が充足し、事務局から専従職員が斡旋されて、編纂業務が現実的に稼動しはじめたのは、昭和51年7月頃であった。

またこのような中央の編纂業務体制の確立に呼応して、各部局でも委員会がもたれるようになった。

丁度、同年8月、学長の交替があり、香月秀雄医学部教授が学長に就任したが、香月学長は、この30年史編纂・刊行を本学の重要な仕事として打ち出すとともに、これに対する予算の裏づけに新たな配慮を示された。

今日まで開かれた編纂委員会は12回、専門委員会は50回をこえるが、学外の専門委員は、休暇期間を除き毎木曜、編集室に顔をあわせ細かい打合せを行った。

事務局では庶務課の文書係(昭和53年3月まで企画調査係)がこの仕事を担当し、献身的に裏方の仕事を捌いてくれた。このような人々の熱意に支えられて、組織面では弱少で、予算の裏づけも少い条件下に、当初の計画通りに仕事を進めることができたのである。

2. 資料収集について

本学の年史編纂の仕事に取組んで最初に驚きと困難さを感じたのは、創立
当時から昭和30年代にいたる基礎資料の欠落ということであった。

当時は未だ評議会や教授会が正式な規程をもたず、従って議事録も残され
ていず、広報機関や文書もなく、一般の記録も見当らないばかりでなく、更
に昭和44年の学園紛争の折に本部の建物が封鎖されて荒らされ、失われたも
のが少なく、個人的に書き留めておかれたメモも不用の文書として焼かれ
たものが多かった。

そこで年史編纂の最初の仕事は、この基礎資料を発掘し再現し収集整理す
るということであり、これに多くのエネルギーが費やされた。

そのために本学創設を推進した初代の小池敬事学長の残された個人的な資
料の中から本学に関係あるものを洗い出したり、当時の教官や事務官が保存
している資料を借用したり、当時の事情に詳しい方々から話を伺い、その内
容を記録にとどめるという「聞きとり」を行ったりした。今日までこの「聞
きとり」をお願いをした方々は、次の43名である。

聞き取り協力者（五十音順）

相 磯 和 嘉	青 木 育 雄	青 木 謹	青 木 孝 悦
赤 穴 宏	池 田 仁三郎	石 田 周 三	市 原 権三郎
伊 藤 忠 雄	内 海 滉	大 嶋 藤 三	大 橋 主 城
緒 方 惟 精	奥 田 秀 行	片 山 喬	香 村 寛 蔵
河 村 貞之助	国 吉 丈 夫	小 林 龍 男	小 松 光
近 藤 精 造	嶋 田 典 司	志 茂 主 税	鈴 木 正 夫
田 中 康 一	谷 川 久 治	鶴 見 卓 三	富 沢 俊 昭
戸 村 正 義	中 島 忠 重	永 澤 勝 雄	萩 原 彌四郎
長谷部 保 司	藤 井 健 雄	三 橋 富 士 男	湊 顕
三 輪 清 三	六 碕 賢 亮	村 越 潔	村 田 昌 己
吉 川 孔 敏	吉 田 治	芳 野 英 昌	

また各方面に散在すると思われる資料の種類と所在を把握するため、当時
の教職員や卒業生及び自治会・寮・サークル部会・運動部等に対して保存さ

後 記

れている資料についての調査を企画し、広く文書で協力方を依頼したが、専門委員会に回答を寄せられ、借用できたものは、次の通りである。

千葉大学30年史資料提供者一覧（総編分のみ）

氏 名	職 名 等 又 は 住 所	資 料 名
片 山 喬	医学部助教授	千葉大学新聞
近 藤 精 造	教養部教授	文理学部改組資料
青 木 謹	館 山 市	千葉大学新聞
白 田 貴 郎	人文学部教授	千葉大学新聞
相 磯 和 嘉	前 学 長	一筋の歯学への道普請
湯 本 讓	千 葉 市	写 真
武 田 敏 夫	教育学部教授	千葉大学新聞
長谷部 保 司	元厚生課厚生係長	学生運動史
阿 部 玄 治	教養部教授	スクラップブック（6冊）
志 茂 主 税	工学部教授	短大昇格のあゆみ
角 田 隆 弘	工学部教授	工学部移転、学園紛争フィルム
吉 武 好 孝	元文理学部教授	回 想 文
南 園 義 一	防府市国衛 2-6-22	感 想 文
戸 井 策 次	山武郡成東町成東2483	感 想 文
吉 岡 俊 亮	元文理学部教授	感 想 文
大 沢 陽 子	兵庫県川西市大和東 2-26-2	感 想 文
三 瓶 繁 男	館山市	感 想 文
田 沢 要	夷隅郡御宿町上布施1400	禅の会誌
橋 本 哲 夫	千葉市黒砂台 1-9-11	写 真
中 村 徳 栄	厚生課留学生係主任	写 真
吉 川 孔 敏	前事務局長	文理学部通信
後 藤 澄 夫	土浦市	かがり火
(千葉大学皮膚科)		明治大正時代の千葉大学医学部附属病院の歴史

このほか当時の県議会と市議会の議事録を調査・複写したり、朝日・毎日・千葉等の各新聞の記事の抜粋複写を昭和23年から50年にかけて行い、その内容をカード化したりした。

これら基礎資料の発掘・収集は、今これを行わないと将来は殆んど不可能になると考えられたものである。

編纂委員会としては、昭和51年と52年の2年間を基礎資料の収集に当て、同時にこれを各部局でも並行して行うこととし、51年を創立当初から30年まで、52年を更に延長して40年代に及ぶようにする方針を立て実行した。

このような仕事は、思ったより労多くして実りの少いものであるが、その過程で思わぬ貴重な資料を発掘することができ有益であった。

3. 編纂方針について

さて以上のような資料収集と並行して、年史の骨格をなす年表の作成が進められ、昭和52年11月、次のような「千葉大学30年史編纂要綱」と「執筆要領」が編纂委員会で作成され、評議会の了承をえた。

千葉大学30年史編纂要綱

I 30年史関係の委員会

企画準備委員会

30年史編纂委員会——各部局（史編纂）委員会

——専門委員会

II 30年史編纂の年次計画

（専門委員会） （部局委員会）

昭和51年度	資料収集	資料収集
昭和52年度	資料収集	原稿執筆
昭和53年度	原稿執筆	原稿整理・提出
昭和54年度	原稿整理	

印刷・校正

昭和55年3月納本

III 30年史の体裁

B5版 880ページ 横書 口絵

1) 第1部（総編）・第2部（部局編）

横書1段組9ポ 写真・図表等（3ページに1枚程度）

2) 第3部（資料編）・第4部（年表）

横書2段組8ポ

IV 30年史の構成

（ページ数）

第1部 総編 170

通史（各章の項目については、「千葉大学30年史総編」参照）

第2部 部局編 540

第1章 教養部 40 40

第2章 人文学部 40 40

第3章 教育学部 40

附属幼稚園 5

附属小学校 5 } 60

附属中学校 5

附属養護学校 5

第4章 理学部 40 40

第5章 医学部 45

附属肺癌研究施設 5

附属環境疫学研究施設 5 } 60

附属脳機能研究施設 5

後 記

第6章	附属病院	30	}	40
	附属看護学校	4		
	附属助産婦学校	3		
	附属診療放射線技師学校	3		
第7章	薬学部	35	}	40
	附属薬用植物園	5		
第8章	看護学部	10		10
第9章	工学部	45	}	50
	附属天然色工学研究施設	5		
第10章	園芸学部	45	}	50
	附属農場	5		
第11章	留学生部	10		10
第12章	生物活性研究所	20	}	25
	附属抗生物質製造試験施設	3		
	附属機器センター	2		
第13章	養護教諭養成所	5		5
第14章	工業短期大学部	15		15
第15章	附属図書館(分館を含む)	20		20
第16章	学生部	10		10
第17章	保健管理センター	5		5
第18章	事務局	20		20
第3部	資料編	130		
第4部	年表	40		

V 執筆の分担

1 総編

通史……………専門委員会

2 部局編

- 1) 各部局史は、それぞれの部局が分担執筆する。
- 2) 附属施設を有する部局の場合、その施設史をどこで(誰が)執筆するかは、当該部局において決定する。
- 3) 各部局は、割当て枚数で書きあげた部局史原稿を締切り期限内に専門委員会に提出する。
- 4) 専門委員会は、提出された部局史原稿を整理し、部局編としてまとめあげる。

3 資料編と年表の作成は専門委員会が行う。

4 専門委員会が整理し、まとめたすべての原稿を最終的に編集するのは、30年史編集委員会である。

千葉大学30年史執筆要領

I 編纂方針

1 共通編纂方針

- (1) 内容は読みやすく、しかも学術的水準を保ち、卒業生や一般の人びとにとって興味深いばかりでなく、大学関係者・研究者にとっても役立つものにする。
- (2) そのときどきの社会的背景(情勢)や、我が国高等教育史(新制大学の歴史)との関連などについても配慮し、本学30年の歩みとその特色が正確に捉えられている内容のものにする。

2 各編ごとの具体的な編纂方針

1) 総編（通史編）

- (1) 序章において旧制の各学校ごとにそれぞれ創設から本学学部になるまでの沿革も取り扱う。
- (2) 第1章以下において、創設（昭和24年）から昭和54年に至る本学30年の歴史を通観する。そこでは、本学全体にかかわる編成（組織）、管理運営、施設（設備）、部局設置（改廃）、移転（統合）、教職員、学生数、予算、計画、行事、学生生活（風俗）等の変遷及び事件などが重要な項目となる。
通史の執筆は、専門委員が担当する。

2) 部局編（各部局史編）

- (1) 本学における各部局の歴史をそれぞれの特色がでるように記述する。
- (2) 内容は、各部局の沿革、研究・教育活動及びその運営などが中心となり、総編との重複をできるだけ避けるように配慮し、記述する。記述年代については、可能な限り最新のものまで取り扱う。
- (3) 各部局史の執筆は、それぞれ当該の部局委員会が担当し、それら全体の最終的な調整を編纂委員会が行う。
- (4) 部局史の編纂に当たっては、概ねつぎの項目に準拠する。

a) 学部（教養部を含む）の場合

- ① 前史並びに学部の構成、発展過程の総説
- ② 教授会を中心とする管理運営、諸規則制定の経過
- ③ 各教室を中心とする研究の組織、特色、業績並びに対社会活動
- ④ 学生の教育を中心とする学科課程、履修方法、学習活動
- ⑤ その他施設、財政等
- ⑥ 問題点と今後の課題

(注)

- ① 教育・研究面で学部の特色がでるよう時期、区分、項目等について配慮する。
- ② 部局編成の変遷（改組等）については、総編において主に取り扱うが、必要最少限に部局史でもふれることができる。
- ③ 部局編の構成は、現在の部局を規準になされているので、旧学芸学部、文理学部、教育学部、理学部、教養部の間で協議し、これらの学部がそれぞれの関係部分を担当する。

b) 研究所の場合

- ① 設立の経過、機構・研究部門の沿革
- ② 教授会を中心とする管理運営、諸規則制定等の推移（変遷）
- ③ 教員、職員の動向
- ④ 研究成果、研究の現状、対社会的関係
- ⑤ その他特記すべき事項
- ⑥ 問題点と今後の課題

c) 図書館の場合

- ① 設立の経過
- ② 機構（組織）の変遷（予算関係を含む）
- ③ 職員の動向
- ④ 蔵書（数）

後 記

- ⑤ 利用状況
- ⑥ その他特記すべき事項（特殊文庫、他図書館との関係等）
- ⑦ 問題点と今後の課題
 - (注) 分館の記述も含める。

d) 学生部の場合

- ① 沿革
- ② 機構
- ③ 寮、その他の厚生施設
- ④ 奨学・援護活動
- ⑤ 学生のサークル活動（その施設）
- ⑥ 学生運動
- ⑦ その他特記すべき事項
- ⑧ 問題点と今後の課題
 - (注) 総編との関連を十分考慮する必要がある。

e) 事務局の場合

- ① 沿革
- ② 機構
- ③ 業務の大要
- ④ 職員の動向
- ⑤ 評議会、全学的委員会
- ⑥ 本学の将来計画
- ⑦ その他特記すべき事項
- ⑧ 問題点と今後の課題
 - (注) 総編との関連を十分考慮する必要がある。

II 執筆要領

- 1 原稿用紙は、所定のものを使用し、記述は横書きとする。
- 2 執筆原稿枚数は、編纂委員会で決定された枚数を限度とし、写真、図表、数表などもその制限枚数内におさめることを原則とする。
- 3 編、章、節などの区分は、部局編の場合、部局名を章とし、章、節（洋数字）まででとどめることを原則とする。節の中をさらに細かく区分する必要がある場合は、項（ ）つき洋数字(1)・(2)、又は肩つき小見出（ゴシック）をつけることができる。
- 4 文体は、「である。」調の平易な口語文とし、敬称や敬語を用いない。ただし、職名については必要に応じてこれをつける場合がある。
- 5 本文のかなづかいは、現代かなづかい、漢字は当用漢字とする。
ただし、固有名詞や学術用語、あるいはかな書きでは誤解をまねくおそれのある場合などには、この限りでない。
- 6 ふりがなは、原則としてつけない。ただし、固有名詞や学術用語などで読みにくいものには、ひらがなでルビ（ふりがな）をその字の上側につける。
- 7 数字は、原則として洋数字を用いる。引用文中の数字についても差し支えない限り、この原則に従う。ただし、固有名詞としての数字はもと（原典）のままとする。（例）学制九十年史
- 8 年月日は、日本年号（外国に関しては西暦）を用い、重要事項（基準となる）の年号には、その横に（ ）して西暦年を付記する。
（例）昭和24年(1949)11月5日
- 9 句読点は、多い目につけ、1つの文（センテンス）はできるだけ短くする。

- 10 かなまじりの法令、規程類には「 」をつけ、漢字のみのものには原則として「 」をつけない。ただし、「学制」のように普通名詞とまぎらわしいものには「 」をつける。
- 11 書名、雑誌名には『 』、資料名、論文名には「 」をつける。
- 12 資料の引用（引用語句、引用文）は「 」に入れ、引用資料名はその末尾に（ ）して示す。また、本文の内容に関する重要な資料（典拠）は文節の末尾に（ ）して示す。すなわち論文式に注記はせず、記述文に織り込むようにする。
- 13 長い引用などで改行して別組みとする場合は、本文より2字さげて書き（この場合、活字を1ポイントおとした組み方をする）、末尾に引用資料名を（ ）で囲む。

—12、13についての注—

- ① 資料の引用は、できるだけ少なくする。
 - ② （ ）内に入れる資料名は、2行の割注する。
- 14 表や図（原則として横書き）は、必ず用紙を改めて書き、本文中にその箇所では当該表・図の参照を求める言葉をいれるようにする。
また、表と図には呼称をつける。

Ⅲ その他

- 1 難解な文章や冗漫すぎる箇所は、編纂委員会の責任において、これを平易にしたり、簡潔にしたりするように求める場合がある。
- 2 同様に文章表記（用字、用語）の統一、調整などをすることもある。
- 3 以上のほか、今後統一していかなければならないことは、編纂委員会、専門委員会でその都度処理する。

さて、この「要綱」並びに「執筆要領」においてとられた基本方針はどのようなものであったか。

従来の大学の年史には、およそ2種の体裁があって、全学的な流れの通史に重点をおくものと、各部局の学科・講座の研究教育活動に重点をおくものとで、その性格を異にしている。

本年史においては、その両面を総合的に捉えるとともに、終戦後の30年の政治・経済・社会・思想の潮流の中で、わが国の高等教育がどのような変遷の道を通り、本学がその背景のもとにどのような発展の足跡を印してきたかをあとづけるように努めた。

このような国の流れに関わらしめることなしに、本学の歩みの本質的把握はできないと思われたからである。

しかしこれは、広範囲な組織的研究の裏づけと高い力量を必要とし、実際にはなかなか言うべくして行い難く、たかだか理念にとどまることになったかもしれない。

しかも総編の通史のみでなく、各部局史にもこれを及ぼそうとすると、困難は愈々増幅される。

各部局史をそれぞれの専門の研究領域に即して、その問題状況や業績の史的な意義を明らかにしてゆくなどということは不可能に近いからである。それには、事柄そのものの困難さのほかに、各研究室の執筆者の姿勢や力量もまちまちであるという条件も加ってくる。

一度提出された原稿を専門委員が目を通し、意見を述べ、話しあって調整をしたが、それにも限度があり、基本方針が十分に浸透したとはいえない。

次にここで、本年史で取り上げられた事項の中、その取り上げ方が問題となる2つの事柄についてふれてみたい。

(1) 各部局の前史

千葉大学として統合された部局には、それぞれ独自の特色ある経歴をもつ前身校があり、それが現在の研究教育の性格や組織を規定している場合が多い。

従ってその内容を明らかにするためには、その前史の歩みが詳細に綴られねばならないが、紙数の関係もあり十分果せなかった。

(2) 学生生活

従来の大学年史は、管理運営や研究業績を中心として学生生活、特に紛争を避けるのが一般の傾向であるといつてよい。

しかし戦後30年のわが国の大学の歩みを通して提起された問題や大学がなしてきた現実の動きを振り返ってみると、学生の印した足跡は大きく、これを軽視することはできない。

この年史では、学生生活を重要な柱としてとり上げることとしたが、実際に当たってみると、資料の不足や問題そのものもつ困難さがあり十分とはいえず、ことに学生生活の底辺にあたる日常生活そのものの実体には殆んどふれることができなかった。

さてこのような方針をふまえて、11章57節にわたる内容の第1次案が昭和52年11月に発表され、その後更にそれが検討を加えられて2次3次の改訂を経て現在のものに至ったが、その間内容について問題とされた事柄についてふれたい。

文理学部の取扱い

本学は、もと旧制高校をもたず、専ら師範学校と理科系の大学・専門学校

の統合によって創設されたものであるが、その中で文理学部は全学の一般教育を担当し、人文系の研究教育を含む学部として、新たな希望をにない、新制大学の中心的な位置と役割をもつものであった。

ことに本学では小池学長をはじめ全学のこれにかかる期待は大きく、華々しい出発をなしたが、その後、歳月の経過とともに幾つかの矛盾が現われ、政府の方針の転換もあって、改組される運命となった。

この年史において、文理学部を部局編の独立の1章として扱うか、改組された人文・理学・教養の3部局で関係する分野を前史的に扱うかについて種々検討がなされたが、結局後者が選ばれた。

従って文理学部に関する事柄については、関係3部局で連絡調整をとったが、重複する部分がないわけではなく、この措置が適切であったかどうかは問題が残るところである。

年表と資料編

この年史編纂の重要な眼目が資料の収集整備に置かれ、いまこれを行わないと散逸して後では收拾ができなくなるということもあって、資料については可能な限り広く素材を集め供することとし事務局の人々によって纏められた。又年表については本学の関係事項のみではなく、教育制度や政治・経済・社会全般にわたる内容も検討され、多くの量のものが椎名・亀松両委員によって検討工夫されたが、頁の制限があり掲載されるものは一部に限られた。

写真と体裁

写真については、なるべく多く採り入れるよう配慮し、4頁に1枚の割でわり当てることとし、またこの機会に、全学にわたって写真を基礎資料の一つとして収集整備しておく必要があると考え、写真編集委員会(表(4))を設け、工学部の赤穴宏教授を中心に地区別アルバムの編集を計画実施した。これによって掘り出された貴重なものもあった。

体裁については、当初は他大学の年史を参照して質の点で種々配慮し、表紙についても本県ゆかりの唐棧織の布地の使用等も企画したが、きびしい内外の諸情勢から方針を変更せざるをえなかった。

教官一覧

新制大学発足の昭和24年5月より昭和54年3月末まで在職された専任講師

後 記

以上の教官に関するもので、「職名」と「備考」は、昭和54年3月末現在、又は退職・転職時のもので、その後については、一切ふれなかった。

4. おわりに

ここに5年にわたる編纂の仕事を終るに当り、一言所懐と要望を述べておきたい。

まず本年史の意義について考えてみると、創立当初から幾多の紆余曲折を辿って今日に至った本学のこの30年の歷程は、いわば新たな発展のための基礎づくりであったということができよう。

率直に言って、この年史は東京大学をはじめとする旧帝大のそれのように、1世紀にわたってわが国の近代化の歴史そのものに深くかかわってきた大学の歩みでもなく、また多くの地方の国立大学のように地域社会の文化発展の中核的機能を果して、地方史として重要な意味をもつものともいいがたいであろう。むしろその意義は、将来にかかっている。

現在の緊迫した国際環境と国内のきびしい諸条件の下で、わが国の文教施策は今後大きな集約的転換を余儀なくされると思われるが、その中で種々の条件に恵まれている本学の将来には、広やかな地平が約束されているとあってよいであろう。

いまや本千葉大学は、新たな実りある総合化を指向して、従来の古い体質の大学とは異った総合大学形成の道を辿ろうとしている。

本年史は、そのための準備の過程を綴ったものといえるのである。

最後に、この仕事の推進に対し陰に陽に協力を惜しまなかった各位と、献身的に尽力された専門委員と本部庶務課員に心から感謝の意を表したい。

今後ここで収集された資料が適切に保存されるとともに、更には毎年度に新たな資料が体系的にこれに加えられ、次代の年史編纂のための一歩がいまから踏み出されてゆくことを希望して、筆を擱きたい。

なおこの年史の執筆に当られた方々は執筆者一覧の通りである。

昭和54年6月

千葉大学30年史編纂委員会委員長

白 田 貴 郎

表(1) 千葉大学創立30周年記念事業企画準備委員会委員

部局等	氏名	期間	後任者氏名	備考
人 文	白 田 貴 郎	50. 4.25 }		
人 文	小笠原 長 和	50. 4.25 }		
教 育	深 山 幹 夫	50. 4.25 }		
理 学	沼 田 真	50. 4.25 }		
医 学	吉 田 亮	50. 4.25 }		
薬 学	池 田 仁三郎	50. 4.25 }		
看 護	大塚 寛 子	50.10.21 53. 7.23		
工 学	藤 沢 義 男	50. 4.25 50.10.20	六 碓 賢 亮	六碓53.4.1退職
園 芸	伊 東 正	50. 4.25 50. 6. 3	宮 崎 元 夫	
教 養	吉 田 治	50. 4.25 }		
研 究 所	黒 田 収 子	50. 4.25 51. 5.31	藤 本 治 宏	
短 大	狩 野 雄 一	50. 4.25 53. 4. 1		
養 成 所	上 原 すゑ子	50.10.21 }		

表(2) 千葉大学30年史編纂委員会委員

部局等	氏名	期間	後任者氏名	備考
人文	◎白田貴郎	50.11.14 }		
評議会	○小笠原長和	50.11.14 }		
人文	青木孝悦	53. 3.30 }		
教育	椎名萬吉	50.11.14 }	福尾武彦	53. 3.30~
理学	青木育雄	50.11.14 }		
医学	萩原彌四郎	50.11.14 }		
薬学	池田仁三郎	50.11.14 }		
看護	大塚寛子	51. 7. 9 53. 7.23	石川稔生	
工学	六碓賢亮	50.11.14 53. 4. 1	赤穴宏	
園芸	岩佐亮二	50.11.14 54. 3.19	石井弘	
教養	阿部玄治	50.11.14 }	吉田治	53. 3.30~
研究所	林誠	50.12.15 }		
養成所	上原すゑ子	51. 5.25 51. 7.18	武田敏夫	
短大	狩野雄一	50.12.15 53. 4. 1	志茂主税	
庶務部長	手塚朝一	50.12.15 }		
経理部長	田中稠生	51. 7.19 53. 3.31	奥野茂良	
学生部次長	近藤純一	50.12.15 54. 3.31	蓼丸博文	
図書館事務部長	田辺広	51. 7.19 53. 3.31	杉山裕	
	戸村正義	50.12.15 54. 3.31		
(留学生部)	松元泰忠	53. 3.30 53.10. 1	補充 青柳雅計	
(保健管理センター)	木下安弘	53. 3.30 }		
(分析センター)	坂井進一郎	54. 3.22 }		
(環境科学研究機構)	鈴木伸	54. 3.22 }		

(◎委員長、○副委員長)

表(3) 同専門委員会委員

所 属	氏 名	備 考
人 文	◎白 田 貴 郎	
人 文	小笠原 長 和	
教 育	椎 名 萬 吉	
学 外	川 名 登	昭和32年文理学部卒業 (史学専攻)
学 外	堀 江 俊 次	昭和32年文理学部卒業 (史学専攻)
学 外	池 田 宏 樹	昭和35年文理学部卒業 (史学専攻)
学 外	亀 松 玲 子	昭和32年文理学部卒業 (史学専攻)

表(4) 同写真編集委員会委員

地 区	所 属	氏 名	備 考
西千葉	工 学 人 文 教 育	◎赤 穴 宏 青 木 孝 悦 青 柳 雅 計	
亥 鼻	医 学	金 子 敏 郎	
松 戸	園 芸	石 井 弘	